西照

西照寺々報〝さいしょう〟
第 4 号
1986年11月1日
発行　浄土真宗本願寺派・西照寺
高岡市吉久2丁目4－40

念仏と生活

米澤　信一

「もったいない」ということと「無駄」ということとの違いは何だろうと考えるときがあります。いつか私の関係している会社で若い社員諸君と四方山話しをしていた折り、話しの中で議題として「もったいない」ということばが日常使われているけれど、このことばを一体どう解釈しますかと各位に問いかけてみた。まずたとえばお父さんである皆さんに子供さんから「もったいない」という言葉はどんな意味かと聞かれたとき皆さんは父親としてどう答えますかと尋ねてみた。そうですねーと考えたすえ、むずかしい問題ですね「無駄」という人もいるのではないでしょうか。しかし意味がすこし違うような気もすると答えた人が一人いました。私もなかなか難解とする問題であると思います。すると今度は私に対しあなたはと質問が私に向けられた。さて私の答えとなりますとやはりいささか困ります。私幼少のころ祖父母及父母との暮しの中でいろいろのことを自然に学びました。思えば幼年時代に生をともにし、人生の旅をする尊敬するよき路づれであったことは論を待ちません。そのお年寄りのあった日に遠く眼をやれば思うともなく童心にかえる感を覚えます。追憶は遠く幼年時代に遡りますがこんなことが記憶のなかにあります。子供のころ夕食をたべ終えて、御馳走さんと立ち上がろうとしますと、たしかお茶わんに一粒か二粒の飯粒が残っていたのでしょう、そう思います。そのとき年寄りからきれいに食べなさい「もったいない」とおしかりをうけたことがありました。朧げながら覚えていますが今も自然の印象として残っている懐しい想い出であります。ところで、さきの議題のようにもしそのとき孫の私から、おじいちゃん「もったいない」ということはどんな意味かと尋ねていたとしたら、多分祖父はこう答えたのではなかろうかと思うのであります。これはあくまでも私の想像です。お米というものは天地自然の恵みを受けます。雨が降る、露がおりる、太陽の光がゆきわたる、そしてお百姓さんが肥料を入れ、草を抜くなど一生懸命働いて秋になって実りが得られるのです。

これに加えて昔のお百姓さんの苦労話しなど説明して、たとえば水田に入り泥にまみれながら当時は蛭などもいた。その蛭に吸いつかれたり大変な労働であったと思う。また取入れどきには台風の吹く季節でもあり稲を掛けたはさが倒れるなど、いろいろ苦労が多々あったと思う。そうしたお百姓さんの御苦労とあわせて天地自然の恵みをうけ、それが集まって一粒の米となることなど子供にわかりやすいように話し聞かせて、もったいない感謝して手を合わせて御飯をいただくことだと懇切に教えたと思います。以上これは私の一粒のご飯の「もったいない」の答えとしました。

しかしこういうものは理論的に説明しようとしてもできないのであって「もったいない」ものは「もったいない」のだと意識以前の無意識のうちに子供の心の中に培ってもらわなければなりません。「もったいない」「おかげ」「ありがたい」というような言葉は心の問題であり感謝する気持ちを理解できない者には所詮縁がないのではないでしょうか。

「もったいない」ということと「無駄」ということのあいだに天と地ほどの懸隔があるように思われます。そして「もったいない」という気持ちは年寄りのおられる家の子供は意識以前に無意識の心の中に養われているものであります。年寄りはその人生経験から、もったいないという心を血肉として学びとっているからです。新しい知識がいろいろ現代社会に出て来ていますが、新しい知識だけでなくその中に伝統から生れた知恵が溶け合ったとき、私は健全な日本人の普遍的な姿がよみがえってくるように思います。

次に感謝の念といいますと私事にわたって恐縮なんですが、我々人間関係にはやはり感謝の念が必要であり、また心が大切であると思っております。申すまでもなく多くの人々の恩恵など、そしてまた我々企業に

（4ページにつづく）

ひかり来たりて ―仏陀の出現―

(4) 光明が生じた!!

岡西法英

六年間にわたる自己との苦闘のはてに、釈尊が菩提樹の下でさとられたことは何だったのでしょうか。

「さとりとは何か」というこの問いは仏教徒にとっては根源的な問いです。しかし同時にまた、これが答だという答のない永遠なる問いでもあります。何故ならば「さとりとは何か」を身をもって知る人は、覚れる人、仏陀以外にはないからであり、「さとりとは何か」が真に知れたらその時は既に自らが仏陀となった時だからです。

迷える凡夫は「さとりとは何か」を知り、語ることはできません。しかし、覚れる人が、その覚りに立って説いた教え、覚りから出た教え、迷える凡夫にも受けとれるように、教えとなった覚りを聞くことはできます。さとりに至る道、さとりに裏付けられた道を知る事はできます。

釈尊一代の説法（経典）と行動のすべてが、実は「さとりとは何か」「さとりに至る道とは何か」という問いに対する釈尊御自身による答であったとも言えます。

答えは釈尊ご自身の教えの上に既に出されています。問題は、それを私の問いに対する答えとして、わがものとして受けとれるかどうか、わが道として歩めるかどうかということです。

『アーナンダよ、修行者らはわたくしに何を待望するのであるか。わたくしは内外の区別なしに法を説いた。さとったことをすべて教えとして語った。完き人の教法には、何ものかを弟子に隠すような「教師の握拳」（ひとに教えない秘密や秘訣）は存在しない』（遊行経）という言葉や、当時釈尊と並んで世の尊敬を集めた宗教家達は本当にさとりを開いているのだろうかというスバッダという遍歴行者の質問に対する『スバッダよ、わたくしは二十九才で善を求めて出家した。スバッダよ。わたしは出家してから五十余年となった。正理と法の領域のみを歩いてきた。これ以外には道の人なるものも存在しない』（遊行経）という答え方は、釈尊の「教え」を離れて「さとり」をせんさくする事の無意味であること、「さとりとは何か」を問うことは、「已れ自身が如何に生きようとしているのか」を問うことでなければならないことをよく示しています。

一代仏教のすべてが釈尊のさとりの表現だとすると、釈尊の教えの全体を貫く基本原理となっているものこそ、菩提樹の下での覚りの内容を語っているものと見なければなりません。

それは一定の教説にまとめられて、「縁起の法」とか「四諦八正道」とか「三法印」とか呼ばれています。

諸行無常、諸法無我、一切皆苦。これを三法印（仏法の特徴である三つの教説）と言います。最も初期に書かれた経典には、定型句として「凡そ無常なるものは苦であり、苦なるものは無我である。無我なるものは、これはわたくしのもの、わたくし、わたくしの我ではない」南伝大蔵経（相応部）と説かれています。

これこそ人間のありのままの姿を凝視して見い出された真理でした。

諸行無常とは、われわれが見るもの、聞くもの嗅ぐもの、味わうもの、触れるもの、こころに想うものすべては移ろい変わっていく

ので〃あてにならない〃ということです。

一切皆苦とは、何もかもが苦しいという意味ではなく〃思うままにならない〃ということです。

諸法無我とは、これは我がもの、これが我である、これが私のたましいであると言える確かなものはない、〃たよりにならない〃ということです。

わが身自身も環境も、望まないのに生滅変化してゆく我が意のままにはならないものであり、これという確かなものは何一つないという事実こそ、覚りの原点であったことがわかります。

ここから、それではどこから、人間の苦しみ悩み、みにくい争いは生じて来るのかという問題の思索追求が行われる中で、縁起の法が明らかになったのです。

「縁起」はまた「因縁」とも訳され、さまざまな要因が縁り合って起っている状態を意味しています。

すべてのものは無常であり苦であり無我であるにもかかわらず、人間の常として、常（永続）、楽（意志実現）、我（自己中心）を願う、無明（無智）と渇愛（きりのない欲望）こそが、苦悩の根本であり人間が見落している決定的要因であることを明らかにしているのが縁起の法です。最もよく整理されたのが「十二因縁」と呼ばれる教説です。今は紙数の制限もありますので述べません。

ここに立って、課題となってくるのが、(1)苦とは何か、(2)苦はどこから起るのか、(3)苦を脱した状態とは何か、(4)苦の原因を断ち、苦を滅した状態に到達するにはどうすればよいのかということです。

これを整理して説いたものが四諦八正道の教説であり、それが釈尊最初の説法の内容であったのです。

「比丘たちよ、苦という聖なる真理（苦諦）とはこれである。すなわち生れることも老いることも、病むことも死することも苦（わが意のままにならぬ現実）である。愁い、悲しみ、苦しみ、憂い、悩みも苦（さけがたい現実）である。憎しみある人と会うのも苦（怨憎会苦）、愛し合う人と別れるのも苦（愛別離苦）、欲しいものが得られないことも苦（求不得苦）である。総じていうとこの人生のあり方すべてが苦（五取蘊苦）である。比丘たちよ、このような苦が生起する因についての聖なる真理（集諦）とはこれである。すなわち、迷いの生存をひきおこし、よろこびとむさぼりとを伴ない、いたるところに執着する愛欲がそれである。これは情欲的な欲望と生存に対する渇愛（生きたい欲）と生存の滅無に対する渇愛（死にたい欲）である。比丘たちよ、このような苦を滅するための聖なる真理（滅諦）とはこれである。すなわち、この渇愛を余すところなく滅し去り、捨棄し去り、離脱してもはや執着することのないようにすることである。比丘たちよ、苦を滅する状態に到達する道としての聖なる真理（道諦）とはこれである。すなわち、正見（正しい見方）、正思（正しい考え方）、正語（正しい言い方）、正業（正しい行ない）、正命（正しい生活）、正精進（正しい努力）、正念（正しい心がまえ）、正定（正しい精神統一）である」

この八正道を、釈尊は、快楽主義と苦行主義の両極端を離れた「中道」であり、この中道こそは、凡夫に眼を開き、智慧を生み、永遠の安らぎと証智と正しいさとりと涅槃に導くものであると言われたのでした。

苦の実相を知り、苦の要因を断ち、苦からの解放を体得し、苦からの解放の道を実践するという、釈尊の全存在をかけた、生き方の全体こそが、釈尊の覚りの内容であったことがわかります。

時に釈尊三十五才、十二月八日未明、明けの明星の輝く頃、菩提樹の下に端坐したもう釈尊の胸に光明が生じたのです。それは取りもなおさず、人間の歴史の上に光があらわれたことでもありました。そしてまた、人間の心の闇が、罪悪と苦悩の本として問われるようになったはじめでもあったのです。

（つづく）

（高岡市内島　教願寺副住職）

身を置くものとして営業自身のなかに既に感謝すべきものがたくさん含まれていることを身をもって感じる毎日でありますが、この感謝の念心が大切というこの点こそ私達現在企業にたずさわるものの尤も大切にしなければならない理念だと常に思っております。

そうした感謝の念、心を大切にして更に努力を重ね一層社会に貢献できる企業を目指して邁進し、社業を通じて社会に奉仕してまいりたいものと念願しております。

そして多くの人の真実にふれ、いろいろ御指導を頂いて年々成長していく過程において更に守備範囲を着実に広げ逐一これが反映するようこれからもこうしたことを胸に秘めて微力を尽くしていくことこそ最大の課題であると認識を新たにしているものであります。

近代産業人の中で念仏門の人がかなり重要な役割をしています。非常に実直に働き、物を大切にする。物をむだに使えばもったいないという思想があります。ありがたいという感謝の精神が知らないうちに近代産業のつっかい棒をしているといえましょう。

たしかにそうだと思います。つまり頼るところがあれば人間は強くなる。頼るところを与えるのは宗教ではないでしょうか。

合掌多謝

（西照寺信徒総代）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

浄土真宗よろず心得

葬儀　④

前号までに葬儀について述べてきましたが、その他に注意しなければならないことを列記します。

●友引の日に葬式を出すと同友を引くとか、卯の日・寅の日にすると凶事が重なるという迷信にわずらわされないようにします。

●法事の時、御詠歌を流したり、床の間に西国三十三番巡拝記念の掛軸などをかけません。

●線香は一本だけ立てて供えることをせず、必ず折って横にして香炉の中へ入れます。

●弔辞が読まれる場合は、前もって弔辞を述べる方にお願いして、浄土真宗にふさわしくない言葉を避けるようにしたいものです。

●避けたい言葉……天国で・地下に眠る人・御霊前・草場のかげで・引導をわたす・冥福を祈る

・安らかにお眠り下さい・幽明境を異にして・故人が永眠しました。

●用いたい言葉……お浄土で・み仏の国で・蓮のうてなで

・御仏前・安養浄土で・仏さまに抱かれてお浄土へ・往生をとげる・お浄土で無上の力を得て・仏様と生まれかわって・つねにわれらとともに・お導き下さい。

●弔電例　・ご逝去を悼み、つつしんでおくやみ申し上げます。お念仏申しましょう。

・ご家族の悲しみを思いつつ、合掌いたします。

・お浄土にお帰りの報に接し、ありし日を偲びます。南無阿弥陀仏。

●満中陰（四十九日）の日が三カ月にわたるのを嫌う人がありますが、これは何の根拠もないことで、四十九（始終苦）が三月（身付き）と語呂を合わせているだけのことです。私達浄土真宗の門徒は、このような因果の道理に背いた迷信的風習はやめるようにし、一切問題にしないという本当の仏教徒の姿勢を貫いてゆかなくてはなりません。

（「浄土真宗葬儀よろず心得」より）

西照寺行事案内

報恩講
十一月十五日逮夜（午後二時）
〜十六日逮夜

大谷派御正忌
十一月二十七日逮夜
〜二十八日逮夜

修正会（元旦会）
一月一日　午前五時
二日　午前六時
三日　午前六時

御正忌
一月十四日逮夜
〜十六日逮夜

お誘い合わせの上、
ご参詣下さいませ。